

対人不安が日本人大学生の謙遜的態度に及ぼす影響

The attitude of modesty in Japanese college students and Social anxiety

若岡 里奈子・緒賀 郷志

(岐阜大学大学院教育学研究科・岐阜大学教育学部)

Rinako WAKAOKA and Satoshi OGA

(Graduate School of Education, Gifu University; Gifu University)

要約

Schlenker & Leary (1982, p.642) は、対人不安を「現実の、あるいは想像上の対人場面において、他者からの評価に直面したり、もしくはそれを予測したりすることから生じる不安状態」と定義している。

本研究では、東洋文化圏において、対人的調和の維持のための1つの方途としてしばしば生じるとされる謙遜的態度に対して、対人不安が及ぼす影響を日本人大学生を対象に検討することを目的とした。謙遜的態度を測定する尺度が存在しなかったため、予備調査で「率直さ」、「虚偽」、「隠蔽」の3つの下位尺度からなる謙遜的態度尺度を作成した。本調査では、「他者からの否定的評価に対する不安」と「社会的場面において経験される不安感や社会的場面からの回避行動」の2種類の対人不安と、謙遜的態度を質問紙調査によって測定し、分析を行った。その結果、「他者からの否定的評価に対する不安」は謙遜的態度との関連が明らかになったが、一方で、「社会的場面において経験される不安感や社会的場面からの回避行動」は関連性が示されなかった。

キーワード：対人不安 (social anxiety), 謙遜 (modesty)

問題と目的

青年期は、高校や大学に入学したり、社会に出て働き始めたりする時期であり、多くの人と出会い、人間関係を今まで以上に広げていく時期でもある。落合 (1990) は、青年期の発達課題の1つに、成長にともなう新たな対人関係の習得があると述べている。一方で、青年期は心理的・身体的に発達する時期でもあり、めまぐるしく変動する社会にあって、そこへの適応に苦慮する青年たちにとっては、不安定性の強くなる時期である (調・高橋, 2002)。このように、心身の諸機能の変化と、行動や心理の質的な転換がみられる時期であるため、心理的に揺れ動きやすい青年期においては、他者との関わり方も変化し、対人場面においても不安や緊張を感じる (中村・高木, 2012)。

対人不安は、Schlenker & Leary (1982,

p.642) によって、「現実の、あるいは想像上の対人場面において、他者からの評価に直面したり、もしくはそれを予測したりすることから生じる不安状態」と定義されている。

Clark & Wells (1995) は、対人不安が強い者は、身体症状を危険や不安のシグナルと解釈しがちであり、他者からの否定的評価にとらわれやすいと述べた。そのため、対人的手がかりに関する処理に偏りが生じ、回避のような「安全な」行動に出るとした。その「安全な」行動とは、相手に対して視線をそらすなどの不自然で否定的な行動であるため、その対応が他者に不快感を与え、実際に他者から否定的な評価を受けることとなる (守屋・佐々木・丹野, 2007)。そのため、ネガティブな相互作用パターンが生じ、対人不安は維持され、悪化するとした。

対人不安の生起はかつて、Leary (1983, 生和

訳 1990, p.64) の自己呈示理論によって、「他者に特定の印象を与えようとして動機づけられているが、そうできるかどうか疑わしい時に生ずる」と仮定されていた。つまり、特定の印象(望ましい印象)を与えようとする動機づけは高いがそれに成功する見込みが小さい場合ほど、人は強い不安を覚える(菅原, 1998)。

しかし、近年では、すべての対人不安のエピソードが自己呈示への関心を含んでいるが、常に対人不安の十分な原因であるわけではないとされている。そして新たに、対人不安の生起には、自己呈示への動機づけの前に、他者からの関係性評価が関連しているという説が提唱されている(Leary & Jongman-Sereno, 2014)。

Leary & Jongman-Sereno (2014) は、対人不安をソシオメーター理論(sociometer theory)と関連付けて説明している。ソシオメーター理論とは、拒絶への反応システムを記述する代表的な理論の一つである。他者から拒絶されたと感じたとき、実際に拒絶されているかどうかにかかわらず、自己関連感情が一時的に悪化することで、関係が脅威にさらされているという警告信号が自己にフィードバックされ、不安を感じる(宮崎・池上, 2011)。ソシオメーターは、対人関係における本当の脅威の発見に失敗することは、関係性における良いサインを脅威と解釈することよりも深刻であるとみなす。そのため、何もないときであっても、潜在的な関係の脅威を見つけ、不安として感じさせる(Leary & Jongman-Sereno, 2014)。そして、関係性の低下が警告されるとき、人々は関係性が低下しないようにふるまうことができる。このように考えると、対人不安は不適當に低い関係性評価をもたらす可能性のある出来事に対する初期警告システムとみなすことができる(Leary & Jongman-Sereno, 2014)。

日本においても、対人不安と初期警告システムに関する研究がされている。西村(2005)は、対人不安が高い者の初期警告システムは、他者から低い関係性評価を表面上受けていない場合であっても、それを受けることを予期し、反応をしてしまうほど敏感であると報告している。その上で、対人不安傾向が高い者は、他者との

関係性および関係における自己をよりネガティブに見積もり、自己との関係性へ他者から低い評価をされることに対して敏感になるため、高い不安を経験すると述べている。

人は、自己評価を維持するために栄光浴、セルフハンディキャッピング、謙遜といった行動をとることが多々ある。その中でも、謙遜行動は自己評価を維持するとともに、他者との関係性を良好に保つための方法として生じる行動であるという側面がある。特に、日本やタイなどの東洋文化圏では、対人的調和を重視する価値観が存在し、調和の維持のための1つの方途として、謙遜行動が生じる(北山, 1998)。

謙遜と似た概念として、自己卑下的呈示(self-deprecating presentation)があり、両者はしばしば区別されずに用いられている。相川(2003)は、自己卑下的呈示とは、自分の能力や遂行水準を否定するような呈示を行うことであると定義している。そして、自己評価を高め、他者からの称賛を引き出すことを意図して行うとともに、他者からの非難を回避し、自尊心の低下を最小限に食い止めることも意図して行われると述べている。さらに、相川(2003)は、自己卑下的呈示には、自己の能力や遂行水準が実際に低いので、そのことをあえて他者に呈示することによって他者から肯定的な評価を得ようとする場合と、実際には自己の能力や遂行水準が高いにもかかわらず、それを表明しなかったり隠したりして、むしろ否定的に自己を呈示することによって、他者から肯定的な評価を得ようとする場合の2つのケースがあるとしている。栗林(1995)が、両者を区別し、後者のケースを「謙遜」としていたことに倣い、相川(2003, p.93)は、謙遜を「実際には自己の能力や遂行水準が高いにもかかわらず、それを表明しなかったり隠したりして、否定的に自己を表現することによって他者から肯定的な評価を得ようとする自己卑下的な自己呈示のこと」と定義した。本研究では、相川(2003)の定義を用いて、謙遜的態度を「実際には自己の能力や遂行水準が高いにもかかわらず、それを表明しなかったり隠したりして、否定的に自己を表現することによって他者から肯定的な評価を得よう

とする行動を意図的に行うこと」と定義する。

相川 (2003, p.94) は、「集団主義 (collectivism) の文化に属している我々は、集団成員と自分との関係を良好に保つために、たえず他者の評価を意識し、他者の自尊心を高める手段として、相対的に自分を卑下し謙遜する傾向がある」とした。このことから、集団主義に属している日本人にとって謙遜は、適応的に振る舞い、他者から受け入れられるためには不可欠な行動であると述べている。

村上・石黒 (2005) は、謙遜は、「社会関係において望ましい振る舞い」として人々に単に支持されているから規範であるのではなく、コミュニケーションをとっている他者が謙遜を望ましいと考えている場合には、自らの態度とは独立にそれを考慮し、謙遜「してみせる」必要があることを示唆している。さらに、村上・石黒 (2005) は、謙遜は社会規範として要求された行動であり、人々が他者との関係性の中でそれを「適切な振る舞い」として認知し、実行している側面が存在していることを示唆している。そして、規範から逸脱する者は、単に否定的に評価されるだけではなく、共同体からの拒絶を受けることがあるため、規範的でない行動に対しては慎重になるとしている。この研究を踏まえて石黒・村上 (2007a) は、ネットワーク・レベル (対人コミュニケーション, 対人ネットワークのレベル) で自己卑下的な態度が共有されていた場合、つまり、身の回りの限定的な他者との間で自己卑下が共有されている場合、自己卑下が提示されやすくなるだけでなく、自己卑下が望ましいとする態度が内在化されると報告している。そしてその内在化により、ネットワーク・レベルでの態度の共有は高まり、ネットワーク内ではさらに自己卑下が生じやすくなるだろうと述べている。

また、相川 (2003) は、謙遜行動と社会的スキル、印象評定についての実験的検討を行い、能力面において謙遜行動を多く示すほど、他者から肯定的な印象をもたれると報告した。このように、謙遜行動は日本人の中で規範として存在しており、謙遜行動をとる者は実際に肯定的に評価されやすいということがわかる。

さらに、石黒・村上 (2007b) は、関係性が謙遜行動の生じやすさに与える影響について検討し、配偶者、親友、同僚・仕事仲間に対しては、謙遜行動は生じにくい、知人、近所の人に対しては謙遜行動が生じやすいと報告している。ただし、同僚・仕事仲間に関しては、自分が目下であると認識している場合は、謙遜行動の生起率が高くなると報告している。このように、あまり親しくない人間に対しては謙遜行動が生じやすいことが示唆されている。また、石黒・村上 (2007b) は、親友に関しては、自分が目下だと認知している場合に自己卑下が生じやすいと報告している。一方、友人に対する謙遜行動は、知人に対する謙遜行動ほどではないが、親友に対する謙遜行動よりも生起率が高く、また、謙遜行動の生起率は謙遜する側が認知する地位関係に左右されないと報告している。

以上のことより、謙遜行動は他者の評価を意識し、他者の自尊心を高めるために用いられるという側面がある。このことから、他者との関係性が低く評価されることに対して敏感である対人不安が高い者は、日本人の集団規範である謙遜的態度をとりやすいと考えられる。そこで本研究では、対人不安が謙遜的態度に及ぼす影響について検討することを目的とする。

石黒・村上 (2007b) が述べたように、謙遜行動には、相手との関係性によってその有無が決まっているという側面があるため、謙遜的態度を測定する際は、誰に対する態度であるかを明確にして測定する必要がある。相手との関係性と謙遜行動の生起率の関連について、石黒・村上 (2007b) は、知人や近所の人のように、あまり親しくない人間に対しては謙遜行動が生じやすく、配偶者、親友に対しては謙遜行動が生じにくいと報告している。そのため、対人不安の高低にかかわらず、知人や近所の人に対しては謙遜行動をとりやすいと考えられるが、対人不安が高い者は、他者との関係性評価に敏感であるため、相手が親友、友人であっても、謙遜行動をとりやすいと考えられる。対人不安が強い者は、自己との関係性へ他者から低い評価をされることに対して敏感になる (西村, 2005)。そのため、たとえコミュニケーションをとる相手

が知人レベルの知りあいではなく、親友、友人の場合であっても、相手が自分と相手の関係について低い評価をするのではないかと怯え、本来の自分をさらけ出さずに謙遜的態度によって隠そうとすると考えられる。しかし、親友に関しては、自分が目上であると認知している場合は謙遜行動が生じやすくなるとされているため、場合によっては対人不安の高さとの関連がみられない可能性がある。よって本研究では、謙遜的態度を向ける相手を友人に限定して検討を行う。

謙遜的態度尺度作成のための予備調査

謙遜的態度尺度作成のため、知人の岐阜大学生54名(男子39名, 女性15名)に対し, 16の質問項目を用いて調査を行った。調査の結果, 謙遜的態度は「率直さ」, 「虚偽」, 「隠蔽」の3つの下位尺度が示唆された。結果に基づき, 質問項目を追加・修正し, 最終的に20項目を決定した。なお, 「率直さ」は謙遜的態度を示さない側面, 「虚偽」は真実ではないことを故意に真実であるとする謙遜的側面, 「隠蔽」は故意に真実を覆い隠す謙遜的側面である。

仮説

「他者からの否定的評価に対する不安」が高ければ高いほど, 謙遜的態度の「虚偽」, 「隠蔽」は高くなるだろう。また, 社会的場面において経験される不安感や社会的場面からの回避行動が高ければ高いほど, 謙遜的態度の「虚偽」, 「隠蔽」は高くなり, 「率直さ」は低くなるだろう。

方法

調査者協力者：調査者協力者は岐阜大学の学生276名(男性133名, 女性137名, 性別不明6名)であった。本研究では, FNE, SADS, 謙遜的態度の尺度それぞれにおいて1項目でも回答が欠損している者, 性別を答えていない者は, 以降の分析から除いた。24名がこれに該当し, 最終的に分析に利用したのは252名(男性125名, 女性127名)であった。平均年齢は, 19.64歳($SD=0.96$)であった。

調査時期：倫理審査委員会からの承認を得たのち, 2015年10月上旬から中旬にかけて, 調査

者の教示による集団実施を行った。

質問紙の構成：

(1) フェイスシート

質問紙のタイトルは「青年期における対人行動についての調査」とし, フェイスシートには, 調査の内容と依頼を記載した。また, 個人が特定されることはないことや, 途中で回答をやめたくなった場合や, 答えたくない場合にはやめてもよいことを明示した。

(2) 他者からの否定的評価に対する不安に関する質問紙

他者からの否定的評価に対する不安に関する質問紙としては, 石川・佐々木・福井(1992)が作成した, Fear of Negative Evaluation (FNE) の日本語版FNEの30項目を用いた。この尺度は, Watson & Friend(1969)が作成した尺度を石川他(1992)が日本語版に標準化したものであり, 次元性が確認されている。回答に際し, それぞれの項目に対して石川他(1992)は「はい」あるいは「いいえ」で答える2件法で評定を求めていたが, 他者評価への不安の個人差をより明らかに測定するために, 本研究では「あてはまる」から「あてはまらない」の4件法で評定を求めた。

(3) 社会的場面において経験される不安感や社会的場面からの回避行動に関する質問紙

社会的場面において経験される不安感や社会的場面からの回避行動に関する質問紙としては, 石川他(1992)が作成した, Social Avoidance and Distress Scale (SADS) の日本語版SADSの28項目を用いた。この尺度は, Watson & Friend(1969)が作成した尺度を石川他(1992)が日本語版に標準化したものであり, 次元性が確認されている。回答に際し, それぞれの項目に対して石川他(1992)は「はい」あるいは「いいえ」で答える2件法で評定を求めていたが, 社会的場面において経験される不安感や社会的場面からの回避行動の個人差をより明らかに測定するために, 本研究では「あてはまる」から「あてはまらない」の4件法で評定を求めた。

(4) 謙遜的態度に関する質問紙

謙遜的態度に関する質問紙としては, 予備調査によって作成した謙遜的態度尺度20項目を用

いた。回答に際し、それぞれの項目に対して「1: まったく行わない」、「2: どちらかといえば行わない」、「3: どちらでもない」、「4: どちらかといえば行う」、「5: 非常によく行う」の5件法で評定を求めた。

調査手続き: 本調査は大学での講義の時間を利用して行われた。その際、卒業研究へのアンケート調査に協力してほしい旨を伝え、質問紙を配布した。教示では、対人不安及び謙遜的態度に関する質問紙であることを知ることによって、回答に歪みが生じるのを防ぐために、対人不安と謙遜的態度に関する調査であることには言及しなかった。

教示文は、「本日は、調査にご協力していただき、ありがとうございます。この冊子は、表紙を合わせて7枚から構成されていますので、落丁がありましたらお申し出ください。この調査では、あなたの日常における対人行動について、あなた自身のことについて質問いたします。ご回答の際にはそれぞれの質問内容をよく読み、すべての質問にお答えください。回答漏れのないようお願いいたします。なお、本調査への回答は任意ですので、途中でやめなくなった場合や答えたくない場合にはやめていただいてかまいません。また、参加の有無は成績に一切関係ありません。本調査の結果は統計的に処理され、個人が特定されることはありません。また、研究と教育の目的以外で用いられませんので率直に思った通りにお答えください。所要時間は約7分です。ご協力の程よろしくお願いいたします。」であった。

結果

1. 各尺度の得点化、因子の抽出

A. 他者からの否定的評価に対する不安を測定するための項目

FNEの一次元性を確認するために確認的因子分析を行ったところ、適合度指標は、 $\chi^2 = 1371.19$, $df = 405$, $p < .001$, $AIC = 15485.449$, $GFI = .678$, $AGFI = .630$, $CFI = .759$, $RMSEA = .097$, $SRMR = .073$ であった。「27. たいていの場合、他の人が私に対して良い印象を持つだろうという自信がある。」という項目の標準化推定値が.30

と低い値を示していたため、削除して再び確認的因子分析を行ったが、FNEの適合度指標は $\chi^2 = 1316.721$, $df = 377$, $p < .001$, $AIC = 14954.467$, $GFI = .678$, $AGFI = .629$, $CFI = .763$, $RMSEA = .099$, $SRMR = .073$ であり、適合度に大きな変化はみられなかった。しかし、FNEが他者評価への不安を測定する尺度であるということ踏まえて考えると、他者評価への不安が低いからといって他の人が自分に対して良い印象を持つという自信があるとは限らないと考えられる。また、この項目は逆転項目であるが、他の逆転項目は「他の人が自分のことを認めてくれなくても、あまり気にならない。」や、「他の人が私をどう思っているか気にかけないほうである。」といった内容であり他の人間のことが「気にならない」といったことを尋ねている。一方で、この項目は自分のことについて「自信がある」ということを尋ねているという点で、他の逆転項目と内容が異なっている。これらの理由より、以下の分析では削除したものをを用いることとした。また、FNEの項目の平均値を算出し、それを尺度得点 ($M = 2.43$, $SD = 0.23$) とした。さらに、内的整合性を検討するために、尺度の信頼性を示す α 係数を算出したところ、 $\alpha = .95$ であった。

B. 社会的場面において経験される不安感や社会的場面からの回避行動を測定するための項目

SADSの一次元性を確認するために確認的因子分析を行ったところ、適合度指標は、 $\chi^2 = 964.713$, $df = 350$, $p < .001$, $AIC = 14437.857$, $GFI = .763$, $AGFI = .725$, $CFI = .780$, $RMSEA = .083$, $SRMR = .068$ であった。「25. 人を引き合わせるようなことは、それほど気にならない。」と、「27. いったん決まった社会的用向きであれば、どのような場であれ、とにかくでかけていく。」という項目の標準化推定値が低い値を示していたため、削除して再び確認的因子分析を行ったところ、適合度指標は $\chi^2 = 897.511$, $df = 299$, $p < .001$, $AIC = 13364.345$, $GFI = .761$, $AGFI = .719$, $CFI = .780$, $RMSEA = .089$, $SRMR = .070$ となった。適合度はあまり大きく変化しなかったが、項目番号25, 27ともに欠損値が全体の2%であり、他の項目よりも多かったことか

Table 1
謙遜的態度確認的因子分析結果

項目内容	率直さ	虚偽	隠蔽
9 自分の得意なことについて隠さずに話す。	.80		
20 自分の成功体験について語る。	.68		
16 自分のやれることはオープンに話す。	.64		
11 他人から褒められた体験を話す。	.56		
6 自分の頑張り具合を話す。	.57		
3 うまくやれた出来事は素直に話す。	.55		
10 良い評価を得たテストでも、わざとあまりできていなかったと言う。		.71	
12 課題を終えていても、まだできていないと言う。		.66	
8 テスト前にしっかり勉強しても、全然していないと言う。		.64	
2 自分の得意なことでもできないと言う。		.59	
19 テストができたとしても不可かもしれないと言う。		.51	
4 自分の能力について認めるようなことは言わない。		.50	
18 自分の得意なことについて自ら話さない。			.73
17 成功をおさめていても、自分のした失敗のみを話す。			.59
5 良い成績をとっても、話すときは曖昧にごまかす。			.54
13 自分の得意なことより、苦手なことを話す。			.55
14 自分のことはなるべく卑下して話す。			.52
1 自分のことは控えめに話す。			.42

N = 252

$\chi^2 = 336.452, df = 132, p < .001$; AIC = 11491.121, GFI = .870, AGFI = .832, CFI = .851, RMSEA = .078, SRMR = .071

削除項目：7 自分の悪い面を自ら話す。

15 褒められたときにはそのことを否定する。

ら、削除するのが妥当であると考えられるため、以下の分析ではその2項目を削除したものをを用いることとした。また、SADSの項目も同様に平均値を算出し、尺度得点 ($M = 2.43, SD = 0.17$) とした。さらに、内的整合性を検討するために、尺度の信頼性を示す α 係数を算出したところ、 $\alpha = .93$ であった。

C. 謙遜的態度を測定するための項目

謙遜的態度尺度20項目についての、固有値の変化は、5.91, 2.12, 1.44, 1.11, 1.03...であった。固有値の変化と因子の解釈可能性を考慮すると、3因子構造が妥当であると考えられた。そこで、3因子を仮定して探索的因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った。その結果、予備調査で想定された「虚偽」項目である「15. 褒められたときにはそのことを否定する。」が「隠蔽」として抽出された。また、「隠蔽」項目である、「1. 自分のことは控えめに話す。」、「5. 良い成績をとっても、話すときは曖昧にごまかす。」、「18. 自分の得意なことについて自ら話さない。」が「率直さ」として、「17. 成功をおさめていても、自分のした失敗のみを話す。」が「虚偽」として抽出され、「隠蔽」項目が少なくなった。そのため、解釈が難しくなり、信頼性も低い値を示していた。

そこで、謙遜的態度尺度は、予備調査で設定した「率直さ」、「虚偽」、「隠蔽」の3つの因子からそれぞれ該当する項目が影響を受けると仮定したモデルで確認的因子分析を行った結果 (Table 1), 適合度指標は、 $\chi^2 = 450.424, df = 167, p < .001, AIC = 12807.416, GFI = .849, AGFI = .810, CFI = .809, RMSEA = .082, SRMR = .076$ となった。標準化推定値が低かった「隠蔽」の「7. 自分の悪い面を自ら話す。」と「虚偽」の「15. 褒められたときにはそのことを否定する。」を削除して、再び確認的因子分析を行ったところ、適合度指標は、 $\chi^2 = 336.425, df = 132, p < .001, AIC = 11491.121, GFI = .870, AGFI = .832, CFI = .851, RMSEA = .078, SRMR = .071$ となり、適合度はより高まった (Table 1)。この適合度を許容されるものとして判断して、謙遜的態度尺度の3つの下位尺度項目の平均値を算出し、「率直さ」下位尺度得点 ($M = 3.32, SD = 0.67$), 「虚偽」下位尺度得点 ($M = 2.64, SD = 0.70$), 「隠蔽」下位尺度得点 ($M = 3.06, SD = 0.63$) とした。さらに、内的整合性を検討するために、尺度の信頼性を示す α 係数を算出したところ、「率直さ」で $\alpha = .80$, 「虚偽」で $\alpha = .76$, 「隠蔽」で $\alpha = .73$ という値が得られた。

2. FNE, SADS, 謙遜的態度における男女差

の分析

男女差の検討を行うために、日本語版FNE、日本語版SADS及び謙遜的態度尺度の下位尺度得点についてWelchの t 検定を行った。その結果、FNE ($t(236.22) = 0.31, ns, d = .04$), SADS ($t(247.2) = 1.08, ns, d = .14$), 率直さ下位尺度 ($t(248.71) = 1.32, ns, d = .17$), 虚偽下位尺度 ($t(241.78) = 0.39, ns, d = .05$), 隠蔽下位尺度 ($t(239.11) = 1.41, ns, d = .18$) すべての尺度および下位尺度において男女の得点差は有意ではなかった。

3. FNE, SADS, 謙遜的態度各下位尺度との相関

謙遜的態度尺度の下位尺度間相関および、日本語版FNE、日本語版SADS、謙遜的態度尺度の下位尺度間の相関をTable 2に示す。

謙遜的態度尺度の下位尺度間相関は、「率直さ」得点と「虚偽」得点には有意な負の相関を示し ($r = -.38, p < .001$), 「率直さ」得点と「隠蔽」得点も有意な負の相関を示した ($r = -.52, p < .001$)。 「虚偽」得点と「隠蔽」得点には有意な正の相関を示した ($r = .64, p < .001$)。

FNE得点とSADS得点には有意な正の相関を示した ($r = .45, p < .001$)。

FNE得点と「率直さ」得点には有意な相関を示さなかった ($r = .00, ns$) が、FNEと「虚偽」得点には有意な正の相関を示し ($r = .25, p < .001$), FNE得点と「隠蔽」得点も有意な正の相関を示し ($r = .23, p < .001$), 仮説通りとなった。

SADS得点と「率直さ」得点には有意な相関を示さなかった ($r = .05, ns$)。SADS得点と「虚偽」得点も有意な相関を示さず ($r = .07, ns$), SADS得点と「隠蔽」得点も有意な相関を示さなかった ($r = .04, ns$)。

仮説では、SADSが高ければ高いほど、謙遜的態度の「虚偽」、隠蔽が高くなり、「率直さ」は低くなると想定していたが、いずれも相関は

みられず、FNEと「虚偽」、「隠蔽」との相関のみが示された。

4. クラスタ分析を用いた群比較

謙遜的態度の3つの下位尺度「率直さ」、「虚偽」、「隠蔽」の下位尺度得点を用いて、クラスタ分析(ユークリッド平方, ward法)を行い、デンドログラムから4群に分けた。また、その4群と「率直さ」、「虚偽」、「隠蔽」の下位尺度得点それぞれを従属変数とした一要因分散分析を行った。

「率直さ」における群間の得点差は0.1%水準で有意であった ($F(3,248) = 103.6, p < .001, \eta_p^2 = .56$)。Holm法(5%の有意水準)による多重比較の結果、「率直さ」の高さは2群 > 4群 > 1群 > 3群の順であった。

「虚偽」における群間の得点差は0.1%水準で有意であった ($F(3,248) = 135.1, p < .001, \eta_p^2 = .62$)。Holm法(5%の有意水準)による多重比較の結果、「虚偽」の高さは4群 > 3群 > 1群 > 2群の順であった。

「隠蔽」における群間の得点差は0.1%水準で有意であった ($F(3,248) = 105.3, p < .001, \eta_p^2 = .56$)。Holm法(5%の有意水準)による多重比較の結果、「隠蔽」の高さは3群 = 4群 > 1群 > 2群の順であった。

以上の結果より、それぞれ各群を以下のように名付けた。1群においては、「率直さ」、「虚偽」、「隠蔽」の得点はどれも中程度だったので、「平均群」と名付けた。2群においては、「率直さ」の得点が高く、「虚偽」、「隠蔽」の得点が高くないので、「率直群」と名付けた。3群においては、「率直さ」の得点が低く、「虚偽」の得点は中程度で、「隠蔽」の得点が高いため、「隠蔽優位群」と名付けた。4群においては、「率直さ」が中程度で、「虚偽」、「隠蔽」の得点が高いため、「高謙遜群」と名付けた。

4群を独立変数、FNEを従属変数として一要因分散分析を行ったところ、群間の得点差は0.1%水準で有意であり ($F(3,248) = 5.65, p < .001, \eta_p^2 = .06$) であった。Holm法(5%の有意水準)による多重比較の結果、FNE(他者評価への不安)の高さは、高謙遜群 > 平均群、隠蔽優位群 > 率直群の順であった。

Table 2
尺度相関表

	FNE	SADS	率直さ	虚偽	隠蔽
FNE	-	.45***	.00	.25***	.23***
SADS	-	-	.05	.07	.04
率直さ	-	-	-	-.38***	-.52***
虚偽	-	-	-	-	.64***
隠蔽	-	-	-	-	-

** $p < .01$, *** $p < .001$

また、4群を独立変数、SADSを従属変数として一要因分散分析を行ったところ、群間に差はみられなかった ($F(3,248) = 1.02, ns, \eta_p^2 = .01$)。

考察

1. 仮説の検討

① FNEと謙遜的態度の相関についての検討

他者からの否定的評価に対する不安と謙遜的態度との相関をみたところ、他者からの否定的評価に対する不安と「率直さ」において相関はみられなかったが、「虚偽」、「隠蔽」とは有意な相関がみられた。よって「『他者からの否定的評価に対する不安』が高ければ高いほど、謙遜的態度の『虚偽』、『隠蔽』は高くなるだろう。」という仮説1は支持された。

「虚偽」とは、真実ではないことを誤って、もしくは故意に真実だとすることである。謙遜的態度尺度における「虚偽」は、「テスト前にしっかり勉強しても、全然していないと言う。」や「課題を終えていても、まだできていないと言う。」といった項目によって構成されているため、故意に、真実でないことを真実であるとするを指している。よって、「虚偽」が高い者は、他者からの「あの人はすぐに自慢するから腹が立つ人だ」といった否定的な評価を受けないようにするために、わざと「できていない」と嘘をつくことで、そのような否定的評価を避けようとする傾向があると考えられる。

「隠蔽」とは、故意に覆い隠すことであるが、「隠蔽」が高い者は、「虚偽」と同様に、他者から否定的な評価を受けないようにするために、故意に自分の高い能力や遂行水準について述べないようにすることで、上記のような否定的評価を避けようとする傾向があると考えられる。

② SADSと謙遜的態度の相関についての検討

社会的場面において経験される不安感や社会的場面からの回避行動と謙遜的態度との相関をみたところ、「率直さ」、「虚偽」、「隠蔽」のいずれの下位尺度とも相関はみられなかった。よって「『社会的場面において経験される不安感や社会的場面からの回避行動』が高ければ高いほど、謙遜的態度の『虚偽』、『隠蔽』は高くなり、『率直さ』は低くなるだろう。」という仮説2は支持

されなかった。

仮説2が支持されなかった理由として、3点が考えられる。まず、相川(2003)が日本人にとって謙遜は、集団の中で適応的に振る舞うための方法であると述べているように、謙遜行動は適応的な自己呈示方略として確立されたものであることが関係しているだろう。社会的場面において経験される不安感や社会的場面からの回避行動をとる者は、回避という不適応な行動を優先させるため、適応的な自己呈示方略として成立している謙遜行動をとる必要がなく、むしろそのような行動をとることすら回避しようとすると考えられる。

次に、社会的場面において経験される不安感や社会的場面からの回避行動と謙遜的態度の間に他の要因があるために、相関がみられなかった可能性も考えられる。両者の間に存在する可能性がある要因の1つとして、文化的自己観が挙げられる。湯澤(2013)は、文化的自己観として、相互協調的自己観と相互独立的自己観を取り上げている。Markus & Kitayama(1991)によると、相互協調的自己観を持つ者は、他者との親和を重んじており、その人の行動は、自分が他者にどう捉えられているかによって決定される。つまり、他者の存在を重要視し、他者から認められることを必要としている。また、相互協調的自己観の特徴として、Markus & Kitayama(1991)は、控えめさや謙遜を挙げている。一方、相互独立的自己観を持つ者は、他から独立し独自の個性を表現することを重んじ、その人の行動は自身の考えや感情によって決定される。また、自己の独特さと完全さを信じ、自己表現、能力開発を目指す。

社会的場面において経験される不安感や社会的場面からの回避をあまり行わない者の中にも、相互協調的自己観を持つ者と、相互独立的自己観を持つ者がいるだろう。そして、相互協調的自己観を持つ者は、友人の前であっても、その友人に自分の行動がどう捉えられているかを気にして、謙遜行動をとる可能性がある。一方、相互独立的自己観を持つ者は、自己の独特さと完全さを信じているため、その人の行動は自分の考えや感情に規定される。自分が他者からど

う捉えられているかを気にしないので、謙遜行動をとる必要性がないため、謙遜行動をとらないかもしれない。

このように、回避行動をとらない者の中にも、違った文化的自己観を持つ者が想定されるため、「回避行動をとらない者」としてひとくくりにすることができず、社会的場面において経験される不安感や社会的場面からの回避行動と謙遜的態度との間に関連性がみられなかった可能性もある。

また、本研究における謙遜的態度尺度は、友人に対する謙遜的態度を測定したもので、つまり、比較的親しい間柄の人間との対人場面における態度を測定するものであった。それに対し、SADSは、比較的親しい間柄の人との対人場面ではなく、社会的場面という異なる性質の場面における不安感やその社会的場面からの回避行動を測定するものであった。社会的場面において経験される不安感や社会的場面からの回避行動をとる者が、親しい間柄の人間との間で必ずしも謙遜行動をとるとは限らない。社会的場面における不安感や社会的場面を回避したいという思いはあるが、もしかしたら友人という親しい間柄の人間の前では不安を感じないため、謙遜行動をとる必要性を感じていないかもしれない。社会的場面における自分と、友人の前での自分が異なるために、社会的場面において経験される不安感や社会的場面からの回避行動と謙遜行動の間に関連性がみられなかったと考えられる。

2. クラスタ分析による検討

調査対象者の群分けで、高謙遜群、隠蔽優位群に分類された者は、「他者からの否定的評価に対する不安」が有意に高かった。つまり、自分の能力や遂行水準について嘘をついたり、隠したりする者や、嘘はつかなくても隠そうとする者は、他者からの否定的評価に対する不安が高いということがわかる。先述したように、村上・石黒 (2005) は、謙遜は社会的規範として要求された行動であり、人々が他者との関係性の中でそれを「適切な振る舞い」として認知しているとした上で、規範からの逸脱者は否定的に評価されると述べている。その社会規範として要

求された行動をとる者は、規範からの逸脱によって否定的に評価されることを恐れるため、つまり、「他者からの否定的評価に対する不安」が強いため、その社会規範として要求される謙遜行動をとると考えられる。

対照的に、平均群、率直群、隠蔽群、高謙遜群いずれにおいても、社会的場面において経験される不安感や社会的場面からの回避行動に有意な差はみられなかった。つまり、友人に対して自分の能力や遂行水準について嘘をついたり、隠したりしようとしまいと、社会的場面において経験される不安感や社会的場面からの回避行動に差がないということがわかる。相川 (2003) が集団成員間の調和を重んじる日本人にとって、謙遜は、有効な自己呈示方略の1つであるとした上で、集団の中で適応的に振る舞うための方法であると述べていることから、有効な自己呈示方略である謙遜行動をとる者は、不安を感じたとしても、回避行動という不適応な方法を選択しないと考えられる。

以上相関検定及びクラスタ分析による検討より、友人に対して自分の能力や遂行水準について、故意に嘘をついたり、隠したりする者は、他者からの否定的評価に敏感であることが明らかになった。また、社会的場面において経験される不安感や社会的場面からの回避行動と謙遜的態度との間には関連がみられないということが示唆された。他者からの否定的評価に対する不安は、限定的な場面について問うものではなかったため相関がみられたと考えられる。しかし、社会的場面において経験される不安感や社会的場面からの回避行動においては社会的場面という限定された場面について問うものであるにもかかわらず、本研究で扱った謙遜的態度が友人との対人場面におけるものであったこと、また、2つの間に他の要因の存在が考えられることが、関連性がみられなかった原因の1つとして挙げるができるだろう。

今後の課題として、いくつかあげることができる。まず、謙遜的態度尺度を洗練し、さらに開発を続ける必要があるだろう。具体的には、本研究において作成した謙遜的態度尺度にはその人が謙遜的態度をとる理由が把握できないと

いう問題点がある。謙遜行動によってその場をうまくやり過ごし、他者から肯定的な評価を得ようとしているのか、謙遜行動が適切な振る舞いであると認識したうえで、謙遜行動をとり、肯定的な評価を得ようとしているのかが、本研究で使用した尺度では測定することができなかった。そのため、謙遜行動をとる理由を尋ねる質問を加える必要があるだろう。

また、「友人」の定義が明確でなかったという問題点もある。調査における「友人」は特に明確な定義が設けられていなかった。そのため、被調査者の中には、「友人」という言葉を見て、親友レベルで親しい人を想像した人もいたかもしれないし、顔見知りよりは多少親しい程度の人を想像した人がいたかもしれない。人によって「友人」の定義が異なっていたために、SADSと謙遜的態度の関連がみられなかった可能性がある。

また、他の要因の検討も今後の課題の1つとしてあげられるだろう。先述したとおり、謙遜的態度とSADSとの間に関連がみられなかった理由として、両者の間に他の要因があった可能性が考えられる。文化的自己観、自尊心といった他の要因も同時に測定することで、対人不安と謙遜的態度についてのさらなる検討が可能になるだろう。

いくつか課題は残ってはいるが、本研究では他者からの否定的評価に対する不安と謙遜的態度の間に関連がみられることを明らかにすることができた。このことは、今まであまり多く研究されていなかった謙遜の生起や構造を理解する助けとなるだろう。また、いくつかさらに開発を続ける点はあるが、今まで作成されていなかった謙遜的態度尺度を作成したことは、謙遜についての研究をより深める助けとなるだろう。

引用文献

- 相川 充 (2003). 謙遜行動に及ぼす社会的スキルの効果に関する実験的検討 東京学芸大学紀要1部門, 54, 93-101.
- Clark, D. M., & Wells, A. (1995). A cognitive model of social phobia. In R. G. Heimberg, M. R. Liebowitz, D. A. Hope, & F.R.Schneier (Eds.), *Social Phobia: Diagnosis, assessment, and treatment* (pp. 69-93). New York: Guilford Press.
- 石黒 格・村上 史郎 (2007a). 態度と行動の共有が自己卑下的自己呈示に及ぼす効果 社会心理学研究, 23 (2), 130-139.
- 石黒 格・村上 史郎 (2007b). 関係性が自己卑下的自己呈示に及ぼす効果 社会心理学研究, 23 (1), 33-44.
- 石川 利江・佐々木 和義・福井 至 (1992). 社会的不安尺度FNE・SADSの日本語版標準化の試み 行動療法研究, 18 (1), 10-17.
- 北山 忍 (1998). 自己と感情—文化心理学による問いかけ— 共立出版株式会社
- 栗林 克匡 (1995). 自己呈示: 用語の区別と分類 名古屋大学教育学部紀要, 教育心理学科, 42, 107-114.
- Leary, M. R. (1983). *Understanding Social Anxiety: Social, personality, and clinical perspective*. California: Sage publications.
- (リアリィ. M. R. 生和 秀俊 (監訳) (1990). 対人不安 北大路書房)
- Leary, M. R., & Jongman-Sereno. K. P. (2014). Social Anxiety as an Early Warning System: A Refinement and Extension of the Self-Presentation Theory of Social Anxiety, In S. G. Hofmann, & P. M. DiBartolo (Eds.), *Social Anxiety: Clinical, Developmental, and Social Perspectives* (pp. 579-597). Academic Press.
- Markus. H., & Kitayama. S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 宮崎 弦太・池上 知子 (2011). 関係喪失のコストが社会的拒絶への反応に及ぼす影響: 相互依存理論とソシオメーター理論による統合的アプローチ 社会心理学研究, 26 (3), 219-226.
- 守谷 順・佐々木 淳・丹野 義彦 (2007). 対人状況における対人不安の否定的な判断・解釈バイアスと自己注目との関連 パーソナリティ研究, 15 (2), 171-182.
- 村上 史郎・石黒 格 (2005). 謙遜の生起に対するコミュニケーション・ターゲットの効果 社会心理学研究, 21 (1), 1-11.
- 中村 千尋・高木 秀明 (2012). 青年期における対人不安・緊張の構造—発達段階による変化に着目し

- てー 横浜国立大学教育相談・支援総合センター
研究論集, 12, 31-52.
- 西村 洋一 (2005). コミュニケーション時の状態不安
および不安生起に関連する要因の検討—異なる
コミュニケーションメディアを用いた比較—
パーソナリティ研究, 13 (2), 183-196.
- 落合 良行 (1990). 青年期の課題 斎藤 耕二・菊池
章夫 (編) 社会化の心理学ハンドブック (pp.196-
209). 川島書店
- Schlenker, B. R., & Leary. M. R. (1982). Social
Anxiety and Self-Presentation: A
Conceptualization and Model. *Psychological
Bulletin*, 92 (3), 641-669.
- 調 優子・高橋 靖恵 (2002). 青年期における対人不安
意識に関する研究—自尊心, 他者評価に対する
反応との関連から— 九州大学心理学研究, 3,
229-236.
- 菅原 健介 (1998). シャイネスにおける対人不安傾向
と対人消極傾向 性格心理学研究, 7 (1), 22-32.
- Watson, D., & Friend. R. (1969). Measurement of
Social-Evaluative Anxiety. *Journal of
Consulting and Clinical Psychology*, 33 (4),
448-457.
- 湯澤 剛 (2013). Willingness to communicateのモ
デルにおける能力認知と実能力の関係について
中部地区英語教育学会「紀要」, 42, 153-160.